

学長就任にあたって

～徳島大学の近況と所信・抱負、地域との連携について

徳島大学長

河村保彦

ご挨拶

2022年4月から徳島大学長に就任します河村保彦と申します。学長就任にあたり、地域にあって歴史と伝統に根ざし、幾多の人材を輩出してきた徳島大学を次の時代に向かってさらに飛躍させるべく取り組んでまいりたいと気持ちを新たにしております。そのような折、「徳島経済」誌への寄稿の機会をいただきましたこと、大変ありがたく思っております。本誌には本県の経済情勢が詳細に記載されており、毎回興味深く拝読しておりました。また、徳島経済研究所理事長 長岡奨様、専務理事 海出隆夫様をはじめ代々の理事長、専務理事の方々には大変お世話になり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

冒頭にまずは私自身のことを少し紹介させていただきます。私は岐阜県可児市(かにし)という、今は名古屋市を中心とする中京地区経済圏のベッドタウンと位置付けられる地に生を得ました。学生時代は、信州松本と宮城県仙台市で過ごし、1年半の渡米生活を経て幸いにも徳島大学に職を得て現在に至っています。徳島県での生活も早や37年目となり、本県で過ごした年月が最も長くなりました。すでに私にとって本県は第二の故郷です。私の学究面における専門分野は化学で、特に有機化学という「亀の子」の化学構造で表される物質を代表とした分野で教育研究に努めてきました。専門分野について少し詳しく記しますと、分子と光との相互作用を研究する有機光化学、新奇な分子構造とそれに由来する分子の機能性を探る構造有機化学や有機機能化学、さらに窒素や酸素、イオウなど複素原子と総称しますが、それらの原子を含んだ複素環化学と呼ばれる分野になります。

こうした分野の教育研究に携わるとともに、さまざまな職務を経て2011年に工学部副学部長として学部全体の管理運営に関わるようになりました。2014年4月に工学部長を拝命してからは、学部や大学院の改組・新設に取り組むとともに、県内外企業や自治体、政財界の方との交流を通じて多くの方々と幅広い関係を築くことができました。また、台湾やマレーシア等の大学との交流協定締結や海外拠点の設置などに携わり、多くの事を経験することができました。さらに、2016年4月の理工学部発足に伴う理工学部長、大学院理工学研究部長や、その後継の社会産業理工学研究部長等を務めた後、2020年4月より教育担当の理事・副学長に就任し、この4月からは5年間の任期で徳島大学長を務めることになりました。

原稿執筆時点では、全国的にオミクロン株の感染が恐るべき勢いで拡大しています。このたびの新型コロナウイルス感染症の猛威に直面し、科学技術万能という現代日本を生きる私たちの確信めいたものが、実は単なる盲信かもしれないとの思いに駆られています。先進的な科学技術の国と自負してきたわが国が、なぜこんなにも新型コロナワクチンや医薬の開発で後塵を拝してしまったかと歯がゆい思いも感じております。それだけにとどまらず、最近はさまざまな学術とその関係の指

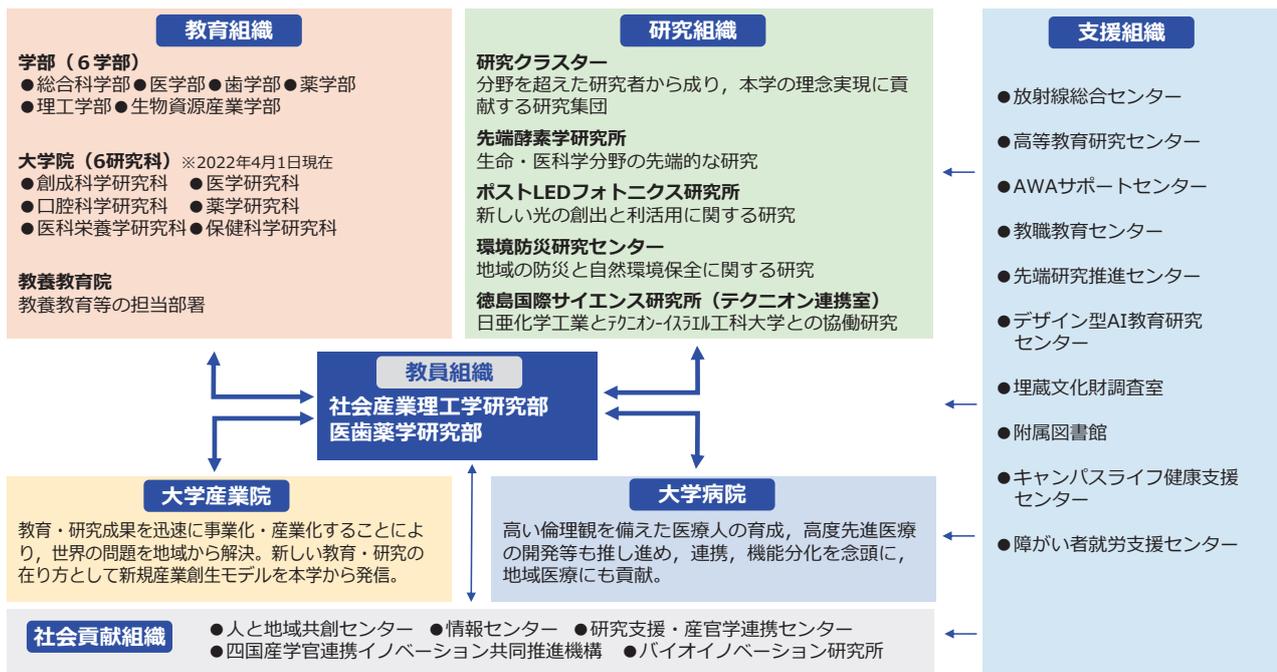
標においても世界の先進的な国々と異なった経年変化の様相を呈し、多くの指標で伸びが止まったり低下したりしています。その原因はどこにあるのか。あるいは、少子高齢化の進みつつある現在、わが国がもしすでに成熟した国家になっているとするなら、むしろ「幸福度指数」で世界における位置を確かめた方が良いのか、とすら思ってしまう。

このような状況の中、県民の皆さまをはじめ多くの方から本学学生に物心両面にわたり多大なご支援をいただいております。ここに、徳島大学を代表して厚く御礼申し上げます。

沿革、近況と所信・抱負

徳島大学は、これまで地域の皆さまに支えていただきながら高等教育機関として確かな足跡を残してきました。その源流となった徳島師範学校、徳島青年師範学校、徳島医科大学、徳島医学専門学校、徳島高等学校及び徳島工業専門学校の6官立学校が発展的に統合され、1949年5月に新制大学として発足しました。さらに遡りますと、徳島師範期成学校(1874年設置)、県立徳島医学専門学校(1943年設置)及び官立徳島高等工業学校(1922年設置)に至ります。その後学部、大学院等の設置、改組・拡充を経て現在6学部(総合科学部、医学部、歯学部、薬学部、理工学部、生物資源産業学部)、6大学院研究科(創成科学研究科、医学研究科、口腔科学研究科、薬学研究科、医科栄養学研究科、保健科学研究科)、教養教育院及び大学病院、附属図書館、4研究所(先端酵素学研究所、ポストLEDフォトンクス研究所、バイオイノベーション研究所、徳島国際サイエンス研究所)、12学内共同教育研究施設(人と地域共創センター、情報センター、放射線総合センター、高等教育研究センター、環境防災研究センター、研究支援・産官学連携センター、AWAサポートセンター、教職教育センター、先端研究推進センター、デザイン型AI教育研究センター、大学産業院、埋蔵文化財調査室)、四国産学官連携イノベーション共同推進機構等を擁する総合大学に発展しました。

徳島大学の教育・研究・教員組織



徳島大学の組織図

このように発展してきた徳島大学ですが、2004年には国立大学法人化という大きな節目を迎えました。この法人は長を学長とし、大学法人が大学の設置・運営を行い、国は運営費交付金の交付を通じて大学を管理するという特異な法人のつくりとなっています。6年間で中期目標期間として業務達成目標を掲げ、その達成のための中期計画に基づき業務運営を行っています。2022年度は第4期中期目標期間の初年度となり、私はこの6年間のうちの5年間で担当します。

ここで、新たな6年間の取り組みを少し紹介したいと思います。その前にまず2016年度から2021年度の第3期中期目標期間の6年間で振り返ってみます。

1. 法人化以降、国からの運営費交付金削減の影響が顕著になった。
2. 財源確保が大学存続の鍵となり、外部資金の獲得方法を工夫することが重要になった。
3. 新型コロナウイルス禍で、教育・研究の在り方が大きく変化している。
4. 今後のポスト・ウィズコロナ時代にはもはや以前への後戻りはない。
5. デジタルトランスフォーメーション(DX)、IoT (Internet of Things:もののインターネット)、AI (Artificial Intelligence:人工知能)、データサイエンス(DS)などの用語が公知となり、Society 5.0 (情報社会と現実社会の融合で社会の課題を解決していく時代)への対応に向けて、教育・研究の質・量ともに変わりつつある。
6. SDGs (Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)として世界共通の取り組み目標が提唱され、学術研究と産学連携を通じた社会貢献のフロントランナーとして大学への期待が一層高まっている。
7. 大学が地域と緊密に関わり、地方創生が大学のミッションの一つとしてクローズアップされた。

私なりに以上のように第3期を総括した上で、第4期の6年間は以下の3点に特に注力して取り組んでいきたいと考えています。

1. 大学運営における透明性の確保:現状の大学運営は透明性の確保に努めていますが、さまざまなステークホルダーの方のご指摘を得て、これまで気付いていなかった公開・周知すべき事項にも目を向けていきたいと考えています。
2. 大学運営におけるトップダウンとボトムアップ:通常会社組織では、大きな方針の決定と運営はトップダウンで推進することも多いと思います。しかし、大学は各学術分野の専門家の集まりであり、会社組織のような強いトップダウンの指揮命令系統はなじみません。また、トップダウンの急進でチェック機能が働かず、社会的な批判に晒されるような事例も見られます。そのため、トップダウンに加えて現場で日々業務に携わる構成員からのボトムアップの提案も重視する必要があると考えています。
3. バックキャストとOODAループ:大学がより効率的に社会変革の鍵となるために、昨今では「バックキャスト」ということがよくいわれます。すなわち社会の課題発見とその解決のために大学ができることを見出し、実行していくという取組方法です。これまで大学も他の組織と同様、Plan - Do - Check - Action からなるPDCAサイクルを回し、業務の達成・向上を図ってきました。また、社会課題の解決についても、学内の既存の研究活動と成果を観てそれらで何が解決できるかという「シーズドリブン」の考え方で対処する例が多くみられました。しかし、今後はそれに加えてOODA (ウーダ)ループを回すことも必要と考えています。これは、Observe (観察) - Orient (方針決定) - Decide (意思決定) - Act (行動)する業務管理の方法です。これは、見方を変えればバックキャストの具体的な動きを一言で表したもの

と考えられます。

これらの基本的な運営方針に基づいて、私は「傾聴すること」と、大学全体を俯瞰的な視点で考え「柔軟に対処すること」の2点に留意しながら大学運営を進めたいと考えています。

高等教育機関としての徳島大学

わが国は高度成長期を経て経済大国となり、バブル期とその崩壊を経て成熟した社会となりました。他方、わが国から世界に目を転じると、現在は簡単には解決できない課題のオンパレードで、新たなブレークスルーの到来を待ちわびるかのように世の中が時々刻々と変わりつつあります。地球環境の深刻な悪化、それに伴う世界的かつ巨大な風水害の頻発、地震、民族間の対立激化と絶え間ない戦禍の火種、資源獲得をめぐる抗争、さまざまな格差社会の到来、難治性疾患、食糧問題等対処の困難な地球規模の課題ばかりです。新型コロナウイルス禍も手伝い、かつてなく急速にリモートでつながる社会が到来している反面、分断と孤立の社会も忍び寄っています。人間らしいしなやかで潤いがあり、あらゆる人々が幸福と感じられる社会とはどのような社会なのか、考え直すべき時が来ているように思います。

従来のように点と点でつながってきた社会が、面展開や三次元的な広がりで関係性を築く社会になってくると、文系理系の両者にわたって俯瞰的に物事が考えられる人材の必要性が一層増すと思われる。最近では量子技術の進展に伴いブックシェルフ型やデスクトップ型の量子コンピュータも全くの夢ではなくなりつつあります。そうなりますと、今以上にAIが発展し身近になると考えられます。AIが私たちの社会に浸透してくるとそれがどのような社会変革を引き起こすのか、経済活動やさらには日常生活の諸々にどんな姿を見せてくれるのか興味は尽きません。また、AIの広範な利用に伴い新たな倫理観の必要性に迫られたり、かつてない哲学的な見方が誘発されるかもしれません。

それらの理解を深め、役立たせるためには経済学や倫理学、哲学などといった個別のいわゆる文系の学術分野を深掘するだけではもはや対応できないと思われます。そのためには、従来の学術分野の縦割りやタコソボ的な教育研究指導ではなく、各分野の垣根を低くし学術的知見を水平展開することが必須となります。徳島大学の第4期中期目標期間において、こうした考え方を今後の社会に対応できる人材育成の要となる基本的な考え方と位置づけたいと思います。かつての共通一次試験から大学入学共通テストへと、大学入学を目指す若者の第一関門は変わりましたが、それぞれ若人は高い熱量をもって大学に入学してきます。一方、それだけにいったん大学入学が叶えば、ある種の達成感や充足感で満たされてしまう学生も少なからずいるように見受けられます。そこで徳島大学では、まず高大接続教育と教養教育でインパクトのある教育を行い、新入学生の気づきと覚醒、学ぶ意味を体感させ円滑に新たなフェーズの高等教育の受け手としてスタートしてもらいたいと願っています。

地域や企業と徳島大学の連携

末尾となりましたが、本誌をご覧の皆さまに、特に現在取り組み中の地域や企業と徳島大学の連携に関する主な事業について、列記させていただきます。具体的な内容につきましては、徳島大学のホームページで各項目をキーワードとして検索いただけますと幸いです。ご興味をお持ちの皆さまにはお手数ですが、どうぞよろしく願いいたします。

1. 徳島大学研究クラスター制度による融合研究・社会実装化研究を推進(2017年4月から)

2. 徳島県が国に採択された地方大学・地域産業創生交付金事業に参画(内閣府 /2018年10月)
3. とくしま創生人材・企業共創プログラムが選定される(COC+R/ 文部科学省 /2020年1月)
4. 地域オープンイノベーション拠点選抜制度(Jイノベ)に選抜される(経済産業省 /2020年4月)
5. 共創の場形成支援プログラムの推進(JST/「育成型」に採択及び「本格型」の参画機関として採択 /2020年12月)
6. ムーンショット型研究開発制度に参画(内閣府 /2020年12月)
7. 日亜化学工業(株)様のご仲介ご支援により、テクニオン-イスラエル工科大学と学術交流協定を締結(2020年12月)、ならびに徳島国際サイエンス研究所を設立(2021年1月)

以上、産官学金の皆さまと徳島大学が連携して進めている主なプロジェクトについて記させていただきました。

こうした皆さまからのご協力・ご支援は、徳島大学のブランド力を高める上でも大きな力となっています。その一例として、大学の社会貢献の取り組みを国連の枠組みを使って可視化するランキング“THE (Times Higher Education)大学インパクトランキング 2021”において、SDGs 3「すべての人に健康と福祉を」で、国内64大学の中で第3位(国立大学1位)、世界871大学の中で第67位にランクインしました。また上記の“とくしま創生人材・企業共創プログラム(COC+R)”の前身となるCOC+では、事業の中間評価及び事後評価の両者で、採択された全42大学中4大学のみとなる最高ランク(S評価)を得ることができました。

結び

国立大学法人として第4期中期目標期間を迎えるにあたり、徳島大学の最近の様子をお伝えしますとともに、私の現状認識、学長としての所信や抱負を記させていただきました。併せて、本学が取り組む地域社会の皆さまと関わりの深いさまざまな事業を紹介させていただきました。

地域の活性化なくして今後のわが国の発展はありません。徳島大学は文系から理系、医療系まで私たちが生活し社会活動を営む上での幅広い分野の研究者と支援スタッフが揃っております。ぜひ皆さまと多様な連携・共創や課題解決に取り組めればと存じます。徳島大学は学生を主役として地域と世界に貢献できる優れた人材輩出に努め、次の飛躍を目指して教職員一体となって取り組んでまいります。今後ともご支援ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



<河村保彦氏略歴>

1978年3月	信州大学理学部化学科卒業
1983年3月	東北大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了
1985年10月	徳島大学工学部助手
2016年4月	徳島大学理工学部長
2020年4月	徳島大学理事(副学長)
2022年4月	徳島大学長